

社会参画の思考構造モデルに基づいた 価値分析型社会科の授業分析研究 — 公民学習「歩くまち京都」を事例に —

橋 本 祥 夫

1 研究の視点

平成17年1月に出された中央教育審議会答申では、21世紀を「知識基盤社会 (knowledge-based society)」と位置づけ、その中でグローバル化が一層進み、幅広い知識と柔軟な思考力が必要なこと、競争と確信が絶え間なく生まれてくる時代であることを述べている。平成24年度から全面実施された学習指導要領では、改善の基本方針として、「習得した知識を活用し、課題を探究する力を育成する」ことや「思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむため言語活動の充実を図る」ことが必要であると明記されている。

今日の社会は、情報化や国際化により急激に変化し、多様化しているため、これからの社会を担う子どもたちには、社会的事象を単なる知識としてとらえ、暗記するのではなく、得た知識を活用し、広い視野から捉え、自分の考えをつくりあげる力が必要となる。

新学習指導要領の社会科の目標として、「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を培う」とある。そのために、社会に対する関心を高め、多面的・多角的に考察し、社会に参画する基礎的教養を培うことが求められている。社会科においては、社会的事象の特色をつかみ、関係を捉え、そのことから自分の考えをつくりあげ、価値判断する活動をさせることで、

思考力・判断力を育成することが重要である。

そこで、本研究では、価値分析型社会科¹⁾において、どのような思考力・判断力が見られるのかを授業分析を通して検証する。これまで、社会科において思考力・判断力を高めるための授業開発は数多く行われてきた。しかし、子どもの思考を分類し分析した研究は少ない。本研究では、子どもの思考をワークシートの記述をもとに分析する。分析ツールとして、思考構造モデルを作成し、子どもの思考にどのような特徴が見られるのかを分類、整理し、その傾向を見ることによって、思考力・判断力を育成できる望ましい学習指導の方法を探っていきたい。

2 社会科における思考力・判断力

広辞苑によれば、思考とは「思いをめぐらすこと、考え」であり、狭義には「感性の作用と区別して、概念・判断・推理の作用をいう」である。判断とは「真偽・善悪・美醜などを考え定めること。判定。思考の根本形式」である。このことから、思考力と判断力は、思考の中で判断する一連の作用と考えられる。

では、社会科において、思考力と判断力はどのような力と捉えられているのだろうか(表1)。

高山(1995)は、思考力は、様々な思考を

働かせながら概念形成を進めることであり、判断力は、それをもとに正しい意味の社会的な価値判断をする力であると述べている。すなわち、思考力は概念形成で、判断力は価値判断と言うことである。そして、思考力の中核に判断力が位置づけられるとした。

森分(1997)は、思考力は、社会的な事象を、客観的に、より広く深く、より間違い少なく捉える力、つまり社会的な事象の客観的な把握力であるのに対して、判断力は、思考力、すなわち客観的な把握を踏まえて、主観的に、自分なりに、捉えていく力と述べている。つまり、思考力は社会的な事象の客観的な捉えであり、判断力はそれをもとにした主観的な捉えということである。森分は、思考力・判断力は、知識・理解と関心・意欲・態度との間にあって、事実認識と価値認識に結びついていく位置に置かれていると主張する。

藤井(1997)は、思考力は、あるものごと(事象)が、他のどのようなものごとと、どのようにつながってゆくかを明確にできる能力であり、判断力は、ものごとのつながりが好ましい結果を生じさせるのか、悪い結果を生じさせるのかを明確にできる力であると述べている。ものごとのつながりを考えていく中で、最終的に判断力に結びつくことから、判断力は思考力の一部であると主張する。

岩田(2009)は、思考力には、事実判断、推理、価値判断があり、そのうちの推理を狭義の思考、価値判断を狭義の判断とし、藤井同様、判断力は広義の思考力の中に含まれるとした。

小原(2004)は、思考力は、知的な問題「なぜ、どうして」を解決していく探求力であり、判断力は、実践的な問題「どうしたらよいか、どの

表1 思考力・判断力に関する定義

| | | |
|-----|----------------------------------|---|
| 思考力 | 高山 森分 藤井 岩田 小原 橋本 | 概念形成 客観的な把握力 ものごとのつながりを明確にできる能力 推理能力 探究力 判断の根拠を獲得する力 |
| 判断力 | 高山 森分 藤井 岩田 小原 橋本 | 価値判断 主観的な把握力 どのような結果になるかを明確にする力 価値判断 意思決定力 意思決定力 |

解決策がより望ましいか」を解決していく意思決定力であると述べている。

以上のように、思考力、判断力をその性質を明らかにするためにあえて分けて示したが、本来その関係は不可分のものであり、一体化している。

澤井は、「思考」と「判断」の関係について以下のように指摘している。

「判断」とは、「選ぶ」「決める」など広くは思考形式の一つとされており、自分の考えを保ったり明らかにしたりする際に現れる思考ともいえる。したがって、「思考」と「判断」は厳密には分けて考えづらく、判断を通して思考が深まるプロセスも含めて「思考・判断」とセットで示される場合が多い。(澤井、2010 ; p13)

筆者の考えは、道筋としては、「思考」があって、その上で「判断」をするのだが、その前提となる「思考」にはあらかじめ「判断」が埋め込まれているという考えである。すなわち、ある「判断」をするために「思考」が必要であり、その「判断」には価値観が大きく影響する。し

たがって、判断力が身につけていなければ、思考力は育たない。また、判断力を身に付けるためには、価値観の形成が欠かせないということになる。思考力は判断をするために行うものであり、判断が伴わない思考はない。すなわち、思考力とは、判断の根拠を獲得する力であり、判断力とは、思考の上での判断をする意思決定力であるといえる。

例えば、「スーパーマーケットでは、どのような工夫をしているのだろう」という問い（学習問題）に対して、思考を働かせる場合について考えてみよう。その問いの問題意識が生まれるためには、「Aスーパーで買い物をする人が多い」という社会的事実との出会いが必要となる。そうでなければ、「工夫をしている」という推測が成り立たない。「Aスーパーで働いている人が何か工夫をしているのだろう」とか「Aスーパーの設備に何か工夫があるのだろう」という予測の下、調べ学習を行い、スーパーマーケットの工夫を考えていく。あるいは、商店街やコンビニエンスストアの工夫を比較することで、スーパーマーケットの特徴を明らかにし、工夫を考えることもできる。また、子ども自らが、経験的に、スーパーマーケットで便利だと感じたことを出し合い、思考を深める場面もある。そうして思考を働かせた結果、「スーパーマーケットは商店街よりも便利なお店だ」という判断になる。しかし、事実判断の段階で、「スーパーマーケットは便利なお店だろう」という判断があり、それを確かめるために、調べ、事実認識をする。逆に言えば、そうした事実判断がなければ、そもそもそうした思考を働かせることもない。またそこで、ほかのお店ではなく、Aスーパーを取り上げることが、Aスーパーが工夫しているお店という価値判断に基づいている。

では、思考を働かせる前提となる事実判断とそれを支える価値判断は誰がするのかといえ

ば、多くの場合、教材研究をした教師である。子どもは、「Aスーパーで買い物をする人が多い」という事実認識は与えられるが、そもそも「どういうお店で買い物をするべきか」という価値判断を迫られていなくて、「Aスーパーが便利なお店だ」という事実判断もないままに、「お店ではどのような工夫をしているのか」という思考を迫られる。したがって、思考を働かせる基盤がないので、思考を働かせるのが難しい。

授業では、「～について考えなさい」という指示が多く、与えられた場面や状況について考えさせられる場面が多い。考える授業が大事としながらも、これでは考えることが嫌になったり、苦痛になったりする子どもができ、思考力はなかなか育たない。もちろん判断力も育たないということになる。

そこで、思考力を育てるためには、まず価値判断を迫る必要がある。つまり、「どういうお店で買物をしたいか」と問う。すると、「安いお店」「近くのお店」「たくさんの商品の種類が置いてあるお店」「みんながよく行くお店」など、様々な理由が上がる。これはお店を選択する理由であり、判断力が生かされる場面である。またそれは、それぞれの子どもがもつ価値観に支えられている。お店選びの価値判断の基準として、「安さ」なのか「品数の豊富さ」なのか「人気（口コミの多さ）」なのか。するとその事実判断をもとに、「なぜ安いのか」、「なぜ品数が豊富なのか」「なぜ人気があるのか」という思考が働く。

このように、思考力を育成するには、価値判断を迫る場面を作る必要がある。そこで問題となるのは、どのようにして価値判断を迫るのかということである。主婦ならば、今日の晩御飯のおかずをどこで買うのかは切実な問題であり、価値判断（安さや産地など）を迫られ、そ

の価値判断に基づいて、事実認識（広告の比較など）をして、思考を働かせ、最終的に意思決定（どの店で買うか）を行う。しかし、普段買い物をしていない子どもにとって、「どういってお店で買物をしたいか」という問いは切実な問題とならず、そのために思考が高まらない。思考力を高めるには、自分自身がどのように行動すべきか迫られる場面を取り入れることが必要である。そこで、本研究では、社会参画を志向する授業²⁾において、「自分ならどうするか、どうすべきか」と判断する場面を設定する。そして、その場合の思考を構造化して、思考構造モデルを作成し、分析のツールとする。

3 価値分析型社会科による思考力・判断力を育成する学習過程

価値分析型社会科は、伝達もしくは収集した知識を用いるだけでなく、その背後にある価値

に迫ることで、社会に生起する問題を合理的に解決する糸口をつかむきっかけを与えてくれる（藤本、2011）。価値判断を迫るためには、「自分ならどうすべきか」という判断だけでなく、責任ある行動までを迫らなければ、その判断はあいまいなものになってしまう。そこで、社会参画を志向する授業において、最終的に自らの行動を決断する場面を設けた。

学習過程としては、まず①社会的事実との出会いから問題意識をもち、これまでの経験や知識をもとに価値判断を行う。（直観的価値判断）②予測に基づいて調べ学習を行い、社会的事実をもとに事実判断をする。③社会的事実の原因や背景を推論する。④それぞれの立場から、どのような考え方、価値観があるのかを探り、価値を吟味する。⑤この場合はどの価値を大切にすべきかを考え、話し合う。（総合的価値判断）⑥個人（自分）と集団（社会）はどのようにすべきかを考え、個人の意思決定をする。⑦解

表2 授業における「思考力・判断力」と思考の流れ

| 生徒の思考 | 思考力・判断力とその内容 | |
|---------------------------|-----------------|--|
| ～について自分は～と思う。 | 問題把握 直観的価値判断 | 社会的事実との出会いから問題意識をもち、これまでの経験や知識をもとに価値判断を行う。 |
| ～ということが問題となっている。 | 事実判断 | 予測に基づいて調べ学習を行い、社会的事実をもとに事実判断をする。 |
| ～が問題となっているのは～が原因である。 | 推論 | 社会的事実の原因や背景を推論する。 |
| それぞれの考えは、～という価値観に基づいている。 | 価値の分析 | どのような考え方、価値観があるのかを探り、価値を吟味する。 |
| ～という条件では～の考え方が望ましい。 | 総合的価値判断 | この場合はどの価値を大切にすべきかを考え、話し合う。 |
| 自分は～のようにする。なぜなら～だからである。 | 意思決定 | 個人（自分）と集団（社会）はどのようにすべきかを考え、個人の意思決定をする。 |
| ～をすることによって、どのような影響が生じるのか。 | 批判的思考 | 解釈の背後にはどのような価値観や立場があるのかを省察し、批判的思考をする。 |

積の背後にはどのような価値観や立場があるのかを省察し、批判的思考をする。

松尾(2008)は、「思考の働き」の順次性を学習過程に組み込むことにより、発達段階に応じた社会認識が育つと考えた。この主張に筆者も同意する。松尾は「知覚を主とした感覚的思考」→「具体的思考」→「形式的操作による思考」という順次性を示した。松尾が示した「思考の働き」は、対象を心的作用によって認識する過程であり、思考の質的变化を表している。それに対して、筆者が示す「直観的価値判断」→「事実判断」→「推論」→「価値の分析」→「総合的価値判断」→「意思決定」→「批判的思考」は、思考がどのような場面で働くかという思考の作用を示したものである。

4 社会参画の思考構造モデル

社会参画を考えるときには、まず自分には何ができるのかを考える。「ごみ問題」ならば、「できるだけごみを出さないようにする」「地域の清掃活動に参加する」などである。これらは、自分のこれまでの行動やライフスタイルを見直

し、自分にできることを実行するものである。

しかし、そこで留まっていたら、道徳の学習と変わらない。社会科における社会参画学習は、社会形成力の育成を目指している(唐木、2010)。すなわち、将来市民になる子どもたちに社会のシステムや制度の更新、廃止について考えさせるようにすることを通して、社会についての関心を高めることが、社会参画学習となるのである。社会科では、よりよい社会の実現を目指し、何が問題なのかを考え、どのように社会の制度やシステムを変えていくことが望ましいかを考えることも大切である。

社会参画で問われる価値とは、大きく分けると個人主義と共同体主義であるといえる³⁾。

社会参画を個人を主体として行うのが個人主義であり、共同体を主体として行うのが共同体主義である。

そこで、「社会参画の思考構造モデル」として、個人でできることを「個人の生活」として左軸に、社会で変えていくべきことを「社会システム」として右軸に配置した。

次に、社会参画の内容である。例えば、「個人の生活」において、これまでも地域の清掃活動に参加していたとする。その時には、ただ何となく参加していたが、学習を通してごみ問題の深刻さに気づき、その意義を理解し、これまで以上に積極的に清掃活動に参加するという場合がある。また、「社会のシステム」でも、これまでのシステムがすべて悪いわけではなく、変えることを前提に話し合うのはおかしい。リサイクルの仕組みがあるが、それが十分に機能していない場合は、その仕組みを積極的に活用するにはどうすればいいのかを考えることも必要である。こうした内容は、現状を把握し受容したうえで、見直していくことである。こうした内容は「受容的・現状把握の思考」とする。

一方で、地域の清掃活動があるのは知ってい

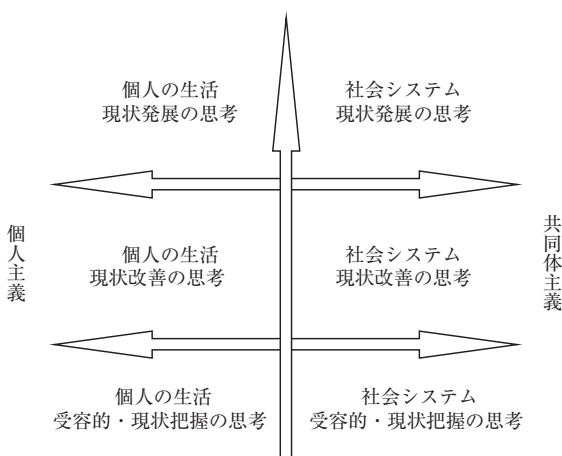


図1 社会参画の思考構造モデル

たが、これまで参加していなかった。学習を契機に、参加するようになったということもあるだろう。リサイクルの仕組みで、構造的な欠陥があり、活用しようにも活用できない状況にあることもある。その場合は、現状の何が問題なのかを明らかにして、改善策を考える必要がある。こうした内容は「現状改善の思考」とする。

さらに、地域の清掃活動だけでは不十分である。もっと新しい取り組みを始めなければならない。また、リサイクルとは違う、新たな制度を創設すべきである。このように、現状からさらに発展して、よりよい方法を考えていく場合もある。こうした内容は「現状発展の思考」とする。

この社会参画における思考構造モデルを分析ツールとして活用し、子どもの思考が、学習の進展とともに、どのように変化しているかを分類、整理し、その傾向を分析する。

5 社会参画を志向する価値分析型社会科の授業実践例

(1) 日時及び指導学年

平成24年11月

京都教育大学附属京都中学校3年

(2) 単元名「歩くまち・京都」

(3) 単元目標

① 京都市の住民参加の取り組みに関心を持ち、自分にできることを考え、進んで地域の活動に参加しようとする意欲を持つ。【関心・意欲・態度】

② 京都市のまちづくりのための基本計画を理解し、それを達成するにはどのような課題があるのかを理解した上で、どのような対策をしていく必要があるのかを考え、提言できる。【思考・判断・表現】

③ 市役所の人の話やパンフレット、インター

ネットの調査などを通して、京都市のまちづくりと住民参加の取り組みについて調べ、課題や解決方法をまとめることができる。【資料活用
の技能】

④ 住民の政治参加には、どのような手順や方法があるのかを理解する。【知識・理解】

(4) 単元について

本単元は、これまでの学習をふまえ、住民参加による政治参加の在り方を考える。同時に、自分たちにできることを考え、社会参画の意識を高め、自分たちにもできることを実践していく。

本単元では、京都市が行っている政策の中で、「歩くまち・京都」に着目する。京都市の交通特性をみると、マイカー台数が増加し、都心部では違法駐車の影響により、交通渋滞が慢性化している。特に国際文化観光都市である京都市では、観光シーズンの交通渋滞がひどく、環境負荷の増大も懸念されている。一方で歩行者の状況は、狭い道が多いにもかかわらず、自動車の交通量が多いので、歩行者が安心・安全で快適に歩くことができるか懸念される。こうした状況から、京都の「交通まちづくり」では、クルマ依存型から人と公共交通優先型に変えていく必要がある。このような京都の交通事情から、平成22年に「歩くまち・京都」総合交通戦略が策定された⁴⁾。その基本理念は以下の2点である。

- ・自動車交通の制限を含めた様々な抑制策などを通じて、クルマを重視した暮らしを、「歩く」ことを中心としたまちと暮らしに転換していくこと。

- ・京都議定書誕生の地であり、環境モデル都市でもある京都が日本を代表する「国際文化観光都市」であると同時に、まちの賑わいを生み出す都市であり続けることを目指す。

一つ目の基本理念では、ライフスタイルを変

えていくことが求められているが、それは個人の努力次第ということではなく、変えていくための環境づくりをしていくことが必要である。また、二つ目の基本理念では、脱クルマ社会を目指すことを通して京都をどのように魅力ある町にしていくのかを考えることが必要である。

そこで、学習問題としては、歩く魅力にあふれるまちづくりのために、どのような公共交通を構築すればいいのか、歩く暮らしのライフスタイルをどのように確立し、そのために自分はどうに行動するのか、この2点に焦点を当てて考えていきたい。

(5) 指導計画 (全7時間)

| 学習課程 | 主な内容 | ねらい |
|-----------------------------------|--|--|
| 問題把握 直観的価値判断 事実判断 推論 | 1 京都市の住民参加と取り組み ・京都市役所の人の話 市民協働政策推進室 市民協働課長 「京都市の住民参加と取り組みの現状」 歩くまち京都推進室 事業推進担当部長 「歩くまち推進の取り組みと課題」 2 歩くまち推進の意義と課題の確認 | ・市役所の職員から直接話を聞くことにより、京都市の取り組みをより具体的に理解する。 ・京都市の住民参加の取り組みの一つとしての「歩くまち」の内容と意義を理解する。 (現状把握・社会の発展の思考) ・「歩くまち」を推進する必要性を感じ、問題意識をもつ。 (現状把握・個人の成長の思考) |
| 価値の分析 | 3 既存公共交通の問題とその背景を考え、既存公共交通を今より使いやすく活用するためにはどうすればいいのかを話し合う。 4 新しい公共交通についての理解を深め、歩くことを中心としたまちづくりを推進するにはどうすればいいのかを話し合う。 5 「歩く」ことを中心としたライフスタイルに変革するために、どのようなことができるのかを話し合う。 | ・既存公共交通の問題とその背景を理解し、改善の方法を考える。 (現状改善・社会の発展の思考) ・新しい公共交通について理解し、未来の公共交通を考える。 (現状発展・社会の発展の思考) ・「歩く」ことを中心としたライフスタイルに変革するために、自分たちには何ができるかを考える。 (現状改善・個人の成長の思考) (現状発展・個人の成長の思考) |
| 総合的価値判断 | 6 「歩くまち・京都」の実現に向けて、公共交通ネットワーク、新しい公共交通システムをどのようにしていくか考える。 | ・「現状改善・社会の発展」「現状発展・社会の発展」の2つの思考に分けて、考えをまとめる。 |
| 意思決定 批判的思考 | 7 「歩くまち・京都」の実現に向けて、ライフスタイルを見直し、自分にできることを考えて、行動宣言をする。 | ・「現状改善・個人の成長」「現状発展・個人の成長」の2つの思考を通して、社会参画の重要性を理解し、行動宣言を考え、社会参加の意欲をもつ。 |

(6) 本單元における「思考構造モデル」との関わり

「歩くまち」を実現するために、まず現状はどうなっているのか、何が問題なのかを考える。これが「受容的・現状把握の思考」である。

京都市の交通特性として、自動車の現状は、マイカーの台数が増加し、さらに都心部では、違法駐車（荷さばき、客待ちタクシーなど）の影響により、交通渋滞が慢性化している。また、観光客が多い京都市では、観光シーズンを中心に激しい交通渋滞が発生し、環境負荷の増大も懸念されている。一方歩行者交通の現状は、都心部の繁華街では狭い歩道に歩行者が集中し、歩行者と自動車がアンバランスな状況となっている。そのため、歩行者が安心・安全で快適に歩くことができない状況である。交通手段の分担率では、自動車の分担率が増加傾向である一方、バスや徒歩の分担率が減少しており、自動車の依存度が高い。公共交通の現状では、京都市は鉄道、バス、共に多くの事業者がある。しかし、連携がうまくできていないため、乗り継ぎがスムーズでなかったり、乗り場がわかりにくかったり、ダイヤが効率的でなかったりという不便さがある。

こうした現状から、「歩くまち」推進の必要性を理解することが、「受容的・現状把握の思考」となる。

「歩くまち・京都」を実現するためには、既存公共交通（公共交通ネットワーク）、まちづくり（新しい公共交通システム）、ライフスタイル（歩いて楽しい暮らし）の3つの柱がある。既存公共交通（公共交通ネットワーク）の改善は、「社会システム・現状の改善の思考」となる。まちづくり（新しい公共交通システム）の推進は、「社会システム・現状の発展の思考」となる。どちらも社会の発展を願うものであるが、現状を改善するものと、それをさらに発展させて新

しく取り組むことの違いがある。ライフスタイル（歩いて楽しい暮らし）の改善は、個人の生活に関わることである。それが、現状の改善なのか、現状の発展なのかは、個人のライフスタイルやこれまでの考え方によるので、同じ内容であっても、「個人の生活・現状の発展の思考」にも「個人の生活・現状の発展の思考」にもどちらにもなりうる（図2）。

(7) 生徒の実態と分析

生徒の「思考力」をワークシートの記述をもとに、5段階で評価し、その傾向を分析した。それぞれの基本的な事項を理解し（社会事象の認識）、「受容的・現状把握の思考」ができていると判断した場合を「3」とし、不十分な場合を「2」、全く理解できていない場合を「1」とした。「受容的・現状把握の思考」ができている場合を「4」、より深い考察と判断ができている場合を「5」とした。

既存公共交通（公共交通ネットワーク）の改善で「3」と判断した生徒は、複数ある事業者の鉄道やバスのネットワークをどう結びつけるかを考えられている生徒である。取り組みとして、乗り場の整備や案内板の表示で接続をス

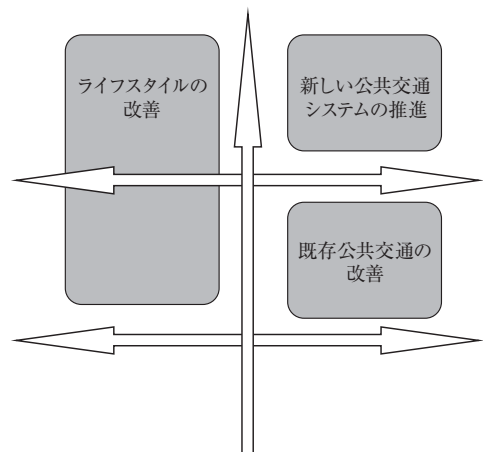


図2 本単元の「思考構造モデル」における位置づけ

ムーズにすること、事業者が違う鉄道やバスに乗れるフリーパスをつくり利便性を図ること、ターミナルである京都駅を使いやすく整備することなどを具体的に考えられている生徒を「4」とした。そこから、それらの考えを比較検討し、自分なりの考えを構築できている生徒を「5」とした。

「5」の生徒が43%、「4」の生徒が32%、「3」の生徒が25%となっている。全員が「3」以上であり、「受容的・現状把握の思考」はしっかりできている（図3）。公共交通機関を利用した経験から、生徒にとって考えやすかったようである。このように、生徒にとって身近な問題ならば、「受容的・現状把握の思考」はしやすいといえるだろう。また4割の生徒が「5」であり、高い関心があることが見られた。

まちづくり（新しい公共交通システム）の推進で「3」と判断した生徒は、マイカーの規制をどのようにするのかを考えられている生徒である。取り組みとして、マイカーの乗り入れ規制をしたり、車線を減らして歩道を拡幅したり、バス専用レーンやバス専用信号など公共交通優先化を図ったりするなど、マイカーが使いづらい状況をつくり出すこと。それと同時に、パークアンドライドの拡充、定着化を図り、周辺に車を止めて、公共交通や徒歩で市内をめぐるようにしていくことなどを具体的に考えられている生徒を「4」とした。そこから、それらの考えを比較検討し、自分なりの考えを構築できている生徒を「5」とした。

「5」の生徒が27%、「4」の生徒が56%、「3」の生徒が14%、「2」の生徒が3%となっている（図4）。既存公共交通の改善よりも全体的に数値が下がっており、「2」の生徒も見られることから、現状を見直していく「現状改善の思考」の方が、新しい取り組みを考える「現状発展の思考」より、考えやすいことが分かる。また、「受

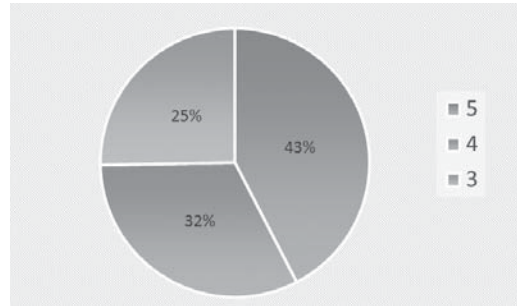


図3 既存公共交通の改善

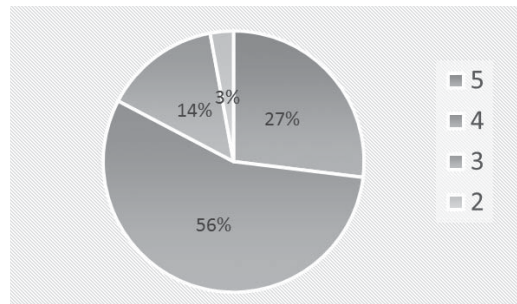


図4 新しい公共交通システムの推進

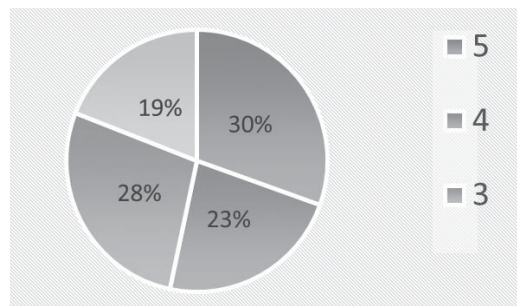


図5 ライフスタイルの改善

容的・現状把握の思考」がしっかりできていないと「現状改善の思考」もできず、さらに「現状発展の思考」も実現可能性の低い理想だけのプランに陥ってしまう。現状改善の限界の向こうに現状発展があり、そこを見据えた思考・判断をさせていくことが重要である。

一方で、社会参画の視点からは、自分にもできることを実践するライフスタイル（歩いて楽しい暮らし）の改善が重要となる。ライフス

タイトルの改善で「3」と判断した生徒は、これまでの生活を見直し、まずどういう場面で車を使っているのかを考えられている生徒である。そして、それは車でなければならないのかを考え、公共機関や徒歩、自転車でもできるのであれば、それに替えてみるという発想をもっている生徒である。「4」と判断した生徒は、車を使う場合と車を使わない場合のメリット、デメリットの違いを考え、具体的な方策を考えられている生徒である。「5」と判断した生徒は、その上で、自分にできることとできないことを判断し、意思決定をしていくことができている生徒である。

「5」の生徒が30%、「4」の生徒が23%、「3」の生徒が28%、「2」の生徒が19%となっている。「2」の生徒が19%もいることから、「受容的・現状把握の思考」ができていない生徒が多数いることがわかる(図5)。ここではライフスタイルの改善として、できるだけ自動車を使わない生活を求められている。自動車を運転しない生徒にとって、「家の人に頼んでみる」ということしかできず、自分でできることではないので、切実な問題ではない。「5」の生徒は「新しい公共交通システムの推進」と同じくらいいることから、社会システムを新しい発想で考えられる生徒は、個人の生活でも同様に考えられている。また、「3」の生徒の多くは、自分のライフスタイルをどのように変えていけばいいのか

が分からない生徒が多数見られ、自分の問題になると、むしろ考えにくい状況が見られた。

以上のことから、「受容的・現状把握の思考」をふまえないと「現状の改善」も「現状の発展」も考えられないことがわかった。

次に、思考力が判断力(意思決定)にどのように影響するのかを考察する。これまでの学習を振り返り、「歩くまち・京都」の実現に向けて、自分にできることを考えて、行動宣言をする活動を行った。行動宣言の評価が高い生徒のうち、「思考力」のワークシートの評価で「5」の評価を得た生徒を調べた。3つの思考(「既存公共交通の改善」「新しい公共交通システムの推進」「ライフスタイルの改善」)が「5」で、行動宣言も具体的に考えられている場合を「3」とし、2つの思考の場合を「2」、1つの思考の場合を「1」とした。いずれの思考も踏まえていない場合を「0」とした。3つの思考とも「5」の生徒は9%、2つの思考が5の生徒は35%、1つの思考が5の生徒は43%、「5」の評価がない生徒は13%だった(図6)。1つから2つの思考が十分にできている生徒がしっかりと判断(意思決定)ができていることがわかる。その生徒は、自分がしっかりと捉えられた思考をもとに意思決定をしたと考えられる。幅広い思考ができているほうが、よりよい判断ができると考えられるが、自分なりのどれか一つの考えが持てれば、意思決定はできる。思考の段階では「5」の評価を受けていない生徒も判断の段階では「5」の評価を受けているというのは、判断をする段階において、思考が促進したと考えられる。つまり、判断を迫られることにより、どういう判断をするべきか、思考力が高まったと考えられる。

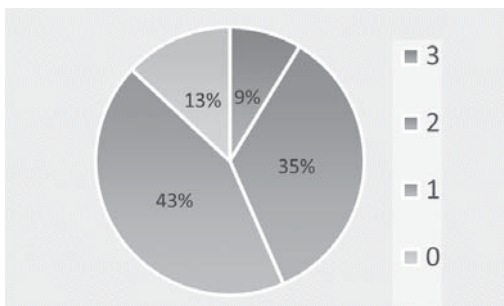


図6 行動宣言

6 まとめ

社会参画の思考構造モデルにより、子ども

の思考を分析すると以下のような特徴が見られる。

- ・「受容的・現状把握の思考」が基盤となり、「現状改善の思考」や「現状発展の思考」が生まれる。したがって、社会参画を意図して「現状改善の思考」や「現状発展の思考」を子どもに働かせたいのならば、「受容的・現状把握の思考」を重視する必要がある。
- ・「受容的・現状把握の思考」が働いたからといって、「現状改善の思考」や「現状発展の思考」が働くとは限らない。しかし、「受容的・現状把握の思考」が働かなければ、「現状改善の思考」や「現状発展の思考」は働かない。
- ・「受容的・現状把握の思考」に比べて、「現状改善の思考」や「現状発展の思考」を子どもに働かせることは難しい。
- ・「現状改善の思考」や「現状発展の思考」を働かせるためには、価値判断を迫ることが必要であり、しかもその価値判断が、子どもにとって切実な問題意識を持つものでなければならない。切実な問題意識を持てるかどうかは、「受容的・現状把握の思考」にかかっている。
- ・「現状改善の思考」と「現状発展の思考」は段階を示すものではなく、並列の関係にある。すなわち、「受容的・現状把握の思考」を受けて、「現状改善の思考」が働くか、「現状発展の思考」が働くかに分かれる。

思考は判断を迫られることにより高まる。判断を迫る場面は、シミュレーション学習⁵⁾でもできるが、バーチャルでは無責任な判断になることもあり、より具体的、現実的、実践的な方がよい。したがって、社会参画を志向する授業を取り入れることで、判断を迫り、思考力を高める学習を取り入れることが重要となる。

また、その事象について、関心を持っていたり、問題意識が強かったり、知識が豊富であっ

たりすると、思考は一層高まる。したがって、子どもが関心や問題意識がもてるような教材や学習展開の工夫が必要となる。

価値判断をさせるときは、様々な考え方（価値）に出合わせ、合理的意思決定⁶⁾ができるようにすることが重要だが、様々な考え方を学び、思考を働かせても、自分の考えのよりどころとなる考え方は限られた考え方に支配されてしまうことがある。それだけ自分の考えを変えろというのは容易ではない⁷⁾。そこで、本稿で示した「社会参画の思考構造モデル」を使い、自分の考えはどのような価値観に基づいているのか、その考えに矛盾や問題点はないのか、批判的思考をし、検証する態度が必要である。

「社会参画の思考構造モデル」は、あくまでも社会参画の場面での思考に限られる。社会参画の場面以外での社会科学学習において、どのような思考構造が見られるかの検討は、今後の課題としたい。

注

- 1) 価値分析型社会科論は、合理的意思決定能力や合意形成能力、価値観に基づく意思決定能力等の育成のための授業方略研究である。
- 2) 唐木清志は、育成すべき資質・能力を「社会形成力」と捉え、その育成に向けて創意工夫を重ねている社会科授業を「社会参画を志向する社会科授業」と位置付けている。
- 3) 水山光春は、政治的・社会的シティズンシップには自由主義的なシティズンシップと共同体主義的なシティズンシップがあると指摘している。本研究で示した「個人主義」は自由主義に近い概念であるが、主体を明確にするために、本研究では「個人主義」という用語を用いている。
- 4) 目標としては、以下の点を挙げている。
 - ・持続可能な脱「クルマ中心」社会のモデル都市の形成を目指して、世界のトップレベルの使いやすい公共交通を構築し、歩く魅力にあふれるまちをつくり、また一人ひとりが歩く暮らし（ライフスタイル）を大切にすることによって「歩くまち・京都」を実現する。

- 5) 山口幸男は、シミュレーション学習を社会科教育・地理教育の立場から「現実世界（過去の世界も含む）の構造を何らかの方法（モデル、演技等）によって抽象化・単純化し、それに基づく教材・教具を操作または模擬的に生起させたり、予測したりすること」と定義している。
 - 6) 合理的意思決定とは、目的・目標を達成するために考えられる実行可能なすべての行動案（手段・方法）の中から、あるいは問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から、より望ましいと合理的に判断できるものを選択・決定する活動である。
 - 7) 価値分析では、一般的にトゥールミン図式と呼ばれる「議論の構造」が援用される。それには、D（データ、事実）、C（主張）、W（根拠）、B（裏付け）の4つの要素がある。批判的思考では、おもにWとBが吟味されることになるが、全体の構造が理解できないと、客観的な判断ができない。そこで本研究では、「思考の構造モデル」を作成し、全体の構造を示し、自分の考え（価値観）の位置づけを明らかにしたうえで判断できるようにしたのである。
- ・松尾鉄城（2008）「思考の順次性と社会認識の形成－知覚を中心とした感覚的思考の場を組み込んだ学習活動の有用性－」社会認識教育実践学研究会編著『社会認識教育実践学の構築』東京書籍。
 - ・水山光春（2009）「政治的リテラシーを育成する社会科－フェアトレードを事例とした環境シティズンシップの学習を通して－」『社会科教育研究』第106号。
 - ・森分孝治（1997）「社会科における思考力育成の基本原則－形式主義・活動主義的偏向の克服のために－」『社会科研究』第47号。
 - ・山口幸男（1999）『新・シミュレーション教材の開発と実践－地理学習の新しい試み－』古今書院。
 - ・「『歩くまち・京都』総合交通戦略」京都市都市計画局 歩くまち京都推進室、2010。
 - ・「『歩くまち・京都』憲章」京都市都市計画局 歩くまち京都推進室、2010。

参考文献

- ・岩田一彦（2009）『小学校社会科学学習課題の提案と授業設計』明治図書。
- ・梅津正美（2009）「思考力・判断力を培うために、「習得」・「活用」・「探究」の学習を活かす－社会科授業改革の実質化をめざして－」『中学校社会科学のしおり』帝国書院。
- ・唐木清志（2010）『社会参画と社会科教育の創造』学友社。
- ・小原友行（2004）「新聞をもちいた授業構成の理論と方法」溝上泰編著『社会科教育実践学の構築』明治図書。
- ・澤井陽介（2010）「社会科における『思考・判断・表現』とその評価」『指導と評価11月号（通巻671号）』図書文化社。
- ・高山博之（1995）『社会科における思考力・判断力の育成、中等教育資料』大日本図書。
- ・藤井千春（1997）『社会科で求められる指導力、授業研究21』明治図書。
- ・藤本将人（2011）「価値分析としての公民学習」全国社会科教育学会編『社会科教育ハンドブック』明治図書。

Abstract

Class Analysis Study of Value Analysis Type Social Studies Based on Thought Structured Model of the Social Participation in Planning

— Through the Case Citizen Learning "Walk the town of Kyoto" —

Yoshio HASHIMOTO

The 21st century is "knowledge-based society". Globalization advances still more, and wide knowledge and a flexible intellectual power is required there. The society suddenly changes by computerization and globalization and diversifies now. Children utilize knowledge and catch society in a large field of vision, and power to build up one's thought is necessary.

It was important to bring up an intellectual power and judgement by getting the characteristic of the social phenomenon in the Social Studies, and catching relations, and making up one's thought from it, and doing activity to do a value judgment. In addition, the author raised interest in society and it was multifaceted and considers a social phenomenon from different angles, and it was demanded that children promote power to participate in the society.

Therefore, in this study, the author inspected what kind of intellectual power, judgement was seen through Class Analysis in Value Analysis Type Social Studies. A lot of class development to raise an intellectual power, judgement in social studies had been performed until now.

However, there was few studies that I classify the thoughts of the child and analyzed. In this study, I analyze the thought of the child based on the description of the worksheet.

The author wanted to investigate a method of the desirable learning instruction that could bring up an intellectual power, judgement by making thought structured model as an analysis tool, and arranging a classification what kind of characteristic was seen in the thought of the child, and watching the tendency.

Key words : Social Studies, Social Participation in Planning, Value Analysis Type Social Studies